# 『消費者教育のすすめ』

## 消費者の自立を目指して

馬場　由子

人間として生まれたその瞬間から、人は消費者になる。たとえ親がかなりの手作り派だっとしても、現代では消費活動なしに生きることはできない。おむつや肌着も、産湯に使う水や、それを沸かすガスでさえ他人が生産したものを消費することになる。地球環境悪化が叫ばれてから久しい。消費活動をすることで環境を破壊している場合もあり得る。生活を見直し、賢い消費者になることで、地球環境の保全に寄与することもできる。幼少時からの消費者教育により、環境や生命を優先させた経済活動を展開する賢い生産者を育てることも可能ではないだろうか。

教育に携わる者が消費者としての自覚を持ち、消費者教育に関心を持つことは、次世代の自立した賢い消費者を育てる上で不可欠である。それが健全な地球の未来を守ることにも繋がると信じる。消費生活専門相談員という資格がある。国民生活審議会の決議に基づき国民生活センターが行う試験で認定される。消費生活センターの相談員はこの資格を持っていることが多い。十数年間主婦としても生活クラブ生協の組合員としても消費活動をしていながら、私はこの資格を取るまで自分が消費者であるという自覚を全くもっていなかった。環境問題や消費者問題についても恥ずかしいくらい無知であった。自身の反省を込めて、子どもたちには消費者として何をすべきかを伝えようと思っている。

本書（米川五郎・高橋明子・小木紀之編、有斐閣、一九九六年）は主に消費者問題と消費者教育の必要性について述べている。地球人としてどのような消費者であるべきか、消費活動と地球環境問題にはどのような関係があるのか、というような本質的な問題について具体的に触れてはいない。ただ消費者教育が大切であるという点で、一人でも多くの方が興味を持って下さることを願いつつ、此所に本書の概要を紹介させて頂くことにする。

国民はすべて消費者である。二十一世紀を目前に消費生活は、著しく変貌しようとしている。消費者問題の背景と見られる情報革命を伴う高度な技術革新、寡占の進行による消費者の弱小化、巧妙なマーケティングの進展、販売方法の多様化等は拡大、発展し、生命・健康を脅かす安全性や品質問題、サービスや販売方法、契約問題、悪質な販売活動による被害等は大型化、多様化し、事態の深刻化が予想される。このような状況下では、自分自身の確固たる価値体系を基に、合理的な商品選択が実現でき、自

分らしい生活を営める自立した消費者であることが望まれる。自立した消費者を育てるには、生涯教育としての消費者教育が最も望ましい。消費者教育によって、主体的、自覚的な消費者が形成されることは、単に個々の消費者が現代社会によりよく適応し、合理的な生活を営むことができるだけでなく、公正で住みよい経済社会を発展させることに貢献する。消費者の苦情や被害を未然に防ぐことにもなり、行政にとっても望ましい。企業が、消費者情報を提供し、消費者の知識を高めることは、企業の成長力を高め、市場を拡大するために重要である。消費者問題や公害・環境問題などに対応しなければ、企業の存続が危うくなる時代を迎えている。「受験体制」といわれる状況のもと、子どもたちが消費者としての資質・能力を身につけるための教育が軽視され、家庭や地域に根ざした生活経験と結びつけた教育実践が行われていないのが実情である。小さい時から生命や生活の大切さ、生活の質などについて考えさせるため、人間形成を本質とする学校教育で消費者教育を行う意義は大きい。成人になってからの学習では、対処療法に役立てるにとどまる。普遍的・体系的に学校での消費者教育が必要になる。児童・生徒は将来成人になれば生産者として経済活動に従事するものも多く、市民として社会を創造する主体者になる。消費者をとりまく環境が大きく変化しており、国際的な市場開放に対応する消費者教育を考えるについても、学校や家庭、消費者団体など、単独ではとても解決の道は求められない。企業には社会的責任、行政には弱者を保護する責務がある。消費者は連帯して自立しなければならないし、そういう消費者を育てる消費者教育が、学校におい

て実現されなければならない。教育とは時間のかかる営みであることを考慮し、長期的視点にたって、生涯学習における消費者教育の位置づけを確立することが急がれる。高齢化社会への対応も、重要な課題である。

本書に同感である。消費者教育は、消費者問題の加害者を育てないためにも大切なことである。消費者教育支援センターからヴィデオを借り、小学六年生に消費者問題について授業を行った。大人並の体格を持ち、塾通いで繁華街を歩く児童にとって、悪徳商法も無縁でない。実際に街で声をかけられた子もいる。生活者として、地球環境問題にも子どもたちの関心は高かった。消費者教育支援センターで貸し出している「水」、「ゴミ」、「熱帯雨林」、「石油」をテーマにした『地球にコンタクト』というヴィデオは、子どもたちに環境問題を考えさせるのに大変役立つので、是非ご覧になって頂きたいと思う。このヴィデオの中の「水は大昔からずっとリサイクルされている。恐竜が飲んだ水、クレオパトラやナポレオンが飲んだ水、それを今私たちも飲んでいる」「ゴミは燃やしてもなくならない。ガスに形を変えるだけ」という言葉は大変印象的であった。

現在中学校の家庭科では消費者問題を扱っている。「消費生活は、自覚と責任から」、「よい生活者への、目と行動」、「地球を守る、地球と生きる」、「くふうしよう、実行しよう、エコロジー」というような標語が書かれた教科書もある。子どもたちが小さい時から周りの大人たちが消費者としての自覚を持って接すれば、教育効果はより上がるのではないだろうか。空調に頼らず、衣服の着脱や窓の開閉で気温の変化に対応することも幼少時から習慣で身につく。たとえ牛乳パックのリサイクルなどを心がけても、再生紙のトイレットペーパーやティッシュペーパーを使わなければ、余剰古紙が溢れてしまう

だけだ。分かることと実行することが一致して初めてリサイクルの成果は上がる。幼稚園で折り紙を使う時、お弁当を食べる時、園児は消費者である。園児の親も消費者である。園児とその親を賢い消費者に育てることができたらと願っている。

（お茶の水女子大学附属小学校）

# 『愛の妖精』と『銀の匙』

渡辺　純一

子どものころの夏休みのうれしさはたとえようがない。日中のうだるような暑さと朝夕の涼しさが独特のリズムを作っていた。朝は学校に通うときよりも早起きして涼しいうちに宿題をすませる。日が高くなるととても勉強どころではない。近所の桜並木に蝉取りにでかけたり、炎天下新設の市民プールに歩いて通った。夜は蚊帳を吊ってその中に寝た。

和机に参考書を積み上げ問題集に取り組んでいる